

水戸堂下町

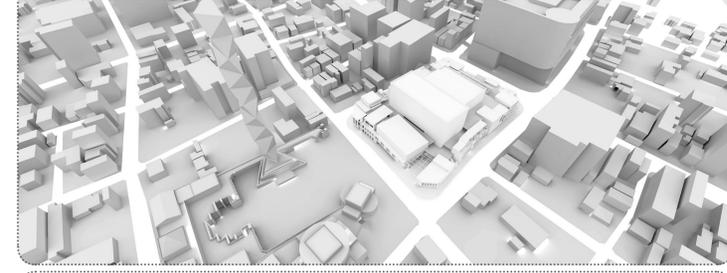
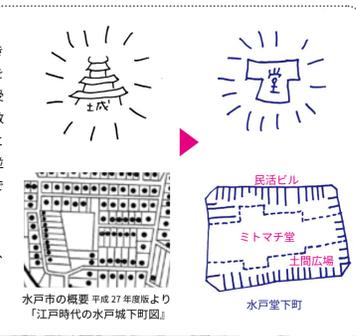


D-056

00. 城下町の骨格を受け継ぐ "水戸堂下町"

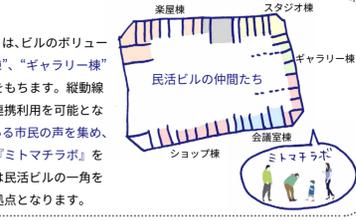
水戸市街地には、城下町の面影を残した狭い間口、深い奥行きで反復するボリュームが賑やかさを生み、街の表情にリズムを与えています。このリズムを踏襲しながらも新たな活動を受け入れる空間を構築します。この計画『水戸堂下町』では、敷地中央の南北軸に沿ったがらんとしたホール空間である『みとまち堂』と見立て、展示ホール・大ホール・多機能ホールを並べて、その四周を密度の高い『民活ビル』と呼ぶ種類の室群で包囲し、これらの隙間を『土間広場』によって満たすことで、この町の骨格を継ぐ建築として再構成します。

『みとまち堂』は規模の異なる催しに対応し伸縮性を兼ね備え、『民活ビル』は、市民の多彩な活動を受け入れ、『土間広場』は内・外や広・狭を変化させながら環状の動線となり、様々な活動や年中の催しを支える空間となります。



01. 『民活ビル』と『みとまちラボ』

音楽・演劇・文化・芸術といった市民の活動を支える『民活ビル』は、ビルのボリュームごとに『スタジオ棟』、『会議室棟』、『ショップ棟』、『楽屋棟』、『ギャラリー棟』となり、各々が階、路面、空階といった異なる環境の空間をもちます。縦動線や出入口の配置によって、独立した使用や隣棟・ホールとの連携利用を可能となります。また、実施案決定後は、これら民活ビルの利用者である市民の声を集め、その活動を設計へと反映させるため、意見の持ち寄りどころ『みとまちラボ』を設置します。ホール竣工前は既存市街地空き店舗に、竣工後は民活ビルの一隅をラボの空間とし、変化する水戸の市民活動のニーズに応える拠点となります。



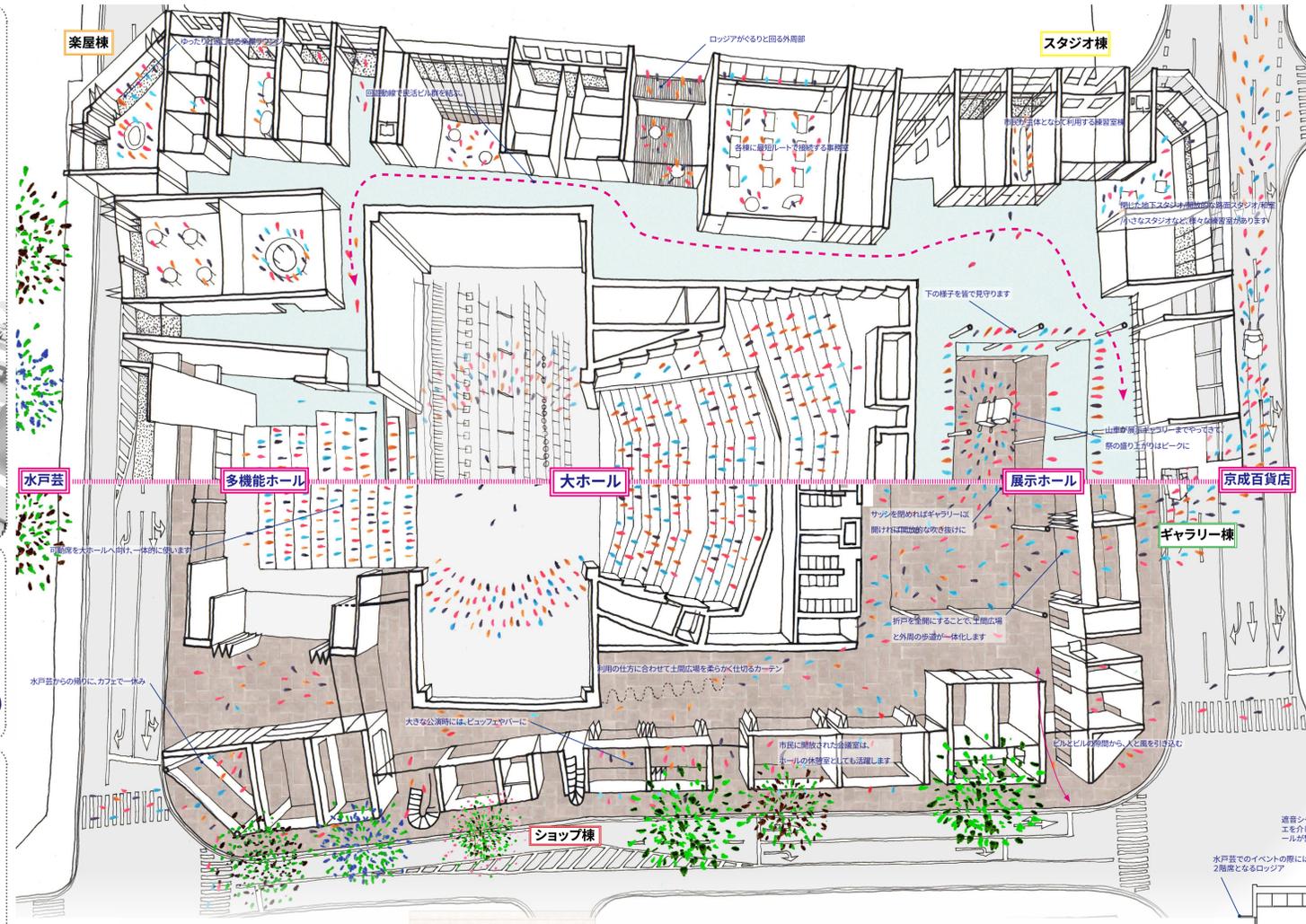
02. 堂下町の顔をつくる

水戸堂下町の立面は、敷地の周縁に林立する民活ビルのファサードから成り、多彩な活動を含む建物の顔となります。さらに、1階の開口部や2階以上の半屋外空間のロジシアによって建物の顔にはリズムが生まれます。まちを訪れる人々を施設内へと自然に誘い、常に賑わうことでまちに躍動が現れます。



03. 適材適所の構造形式

中央の大ホールの舞台・客席は、十分な耐力壁を有するSRC造とし、大スパンの鉄骨柱・トラス梁を仮設として工期短縮を図ります。大ホール部は建物全体のセンターコアの役割を果たし、周縁の民活ビルはそれぞれ耐力壁を有するRC造で構成されます。展示ホール・ギャラリー等では、開放性を優先し鉄骨ポスト柱とします。



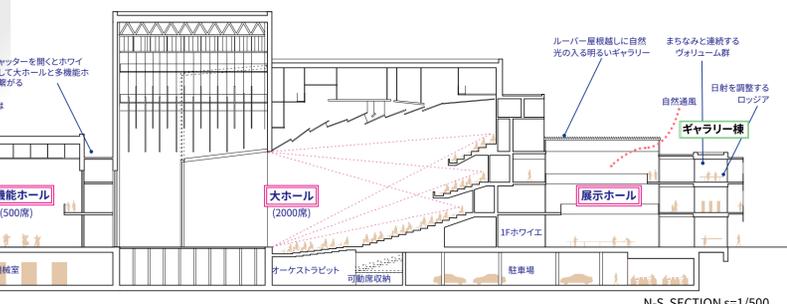
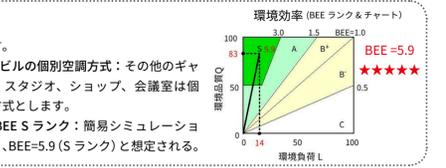
04. ミトマチ堂の提案

- ホールの独立性と融通性を確保：各機能が所定の目的を発揮できる独立性と、使い方に合わせた融通性を持ち、より幅広い文化活動を展開できる場とします。
- ホールを取り巻く回遊動線：大ホール利用のない時は、ホワイエから舞台裏動線を一体化させ諸室を表現し、多目的に利用できます。
- 目的に合わせた選音計画：大ホール間にパuffersゾーンを設け、かつスライドで開放可能な高性能の2重扉で遮音します。
 - 大ホール・多機能ホール / 展示ホール
大ホールは単独で使用し、多機能ホールは展示ホールを独立して使用する各々個別のエンタランスとホワイエをもつ。
 - 大ホール・多機能ホール・広場 / 展示ホール・ギャラリー棟
大ホールは単独で使用し、多機能ホールは広場、ホワイエの一部と一体的にスラスト型で使用。展示ホールはギャラリー棟と一体的に使用。
 - 大ホール・ホワイエ / 多機能ホール・広場 / 展示ホール / ギャラリー棟
大ホールと多機能ホールを一体的にセンターステージ形式として使用。展示ギャラリー可動壁を開放しロビー空間とする。
 - センターステージ型 / 大ロビー
大ホールと多機能ホールを一体的にセンターステージ形式として使用。展示ギャラリー可動壁を開放しロビー空間とする。



05. 環境設備への配慮

- 『土間広場』の無空調化：南風を取り入れ、回遊導線に流れる抜け確保されているため、中間期は無空調として、まちの延長としての土間空間が楽しめます。
- ホールの空調方式：ホールを中心に集約します。
- 民活ビルの個別空調方式：その他のギャラリー、スタジオ、ショップ、会議室は個別空調方式とします。
- JCASBEE S ランク：簡易シミュレーションにより、BEE=5.9 (S ランク) と想定される。



N-S SECTION s=1/500

